目と身体と脳をつなぐ

ビジョントレーニング

【第14回】 極めて実践的なトレーナー養成講座㊦

一般社団法人 日本ビジョントレーニング普及協会理事 横田幹雄

「子どもの未来」につながることを実感

前回に続いて、当会が運営する「プロフェッショナルビジョントレーナー養成講座」を受講なさった小学校教諭Aさん（支援学級担任）のお話をお伝えします。以前は、自らの支援方法に迷いがあったというAさん。本講座で取り組むべきことが明確になるとともに、支援する子どもたちに変化が現れました。

◇

――講座を受講なさって約3カ月間、新たな支援方法に取り組んでこられた中で、子供たちには具体的にどのような変化が見られるようになりましたか？

Aさん まず、とてもうれしかったことがありました。それは保護者との面談でわかったことなのですが、ビジョントレーニングを学校でうまくできなかった子が自宅で一生懸命練習しているというのです。普段はおとなしい子なんですよ。その子が自分で意欲的に取り組む姿を見て、ご両親が驚き、また、非常に喜んでいらっしゃいました。

――その子はプログラムができるようにまで、あきらめずに練習したんですね？

Aさん ええ、そうなんです。何日かして、「先生、あれできるようになったよ！」って言ってきて、うれしそうに見せてくれましてね。自己肯定感が増したということでしょう。それ以降、その子の表情が変わり、何事にも意欲的に取り組むようになって、一つ成長したことがはっきり見て取れました。

――子どもたちには、文字、形、数の概念など、学習面で課題があるということでしたが、その点では変化がありましたか？

Aさん はい、おかげさまでビジョントレーニングの効果がありました。漢字をなかなか覚えられないという子どもが、この3カ月の間に少しずつ書けるようになっていき、しばらくすると、漢字のテストで100点を取るようにもなったんですよ。そのことで子どもは明るくなり、積極性が増していきました。

とにかく全員に言えることは、わずかな期間に字が整ってきて、書き間違いも減ってきたということ。養成講座の中で習った「視空間認知」ができてきたのではないかと思います。

そのほか最初は苦手だった「追従」のトレーニングも、最近はみんなスムーズに眼球が動くようになって、視点を逸らすことなく目標物を追うことができるようになっています。

――当会のビジョントレーニングのテーマ「子どもの未来を科学する」について、当初はピンとこなかったそうですね？

Aさん そうそう、なんだか大げさだなあと思って（笑）。

ところが、子どもたちが日々目に見えて変わっていく。私自身の指導も変わっていくことで、まさに「子どもの未来」につながることを実感できるようになりました。毎週の講座で理論や方法を学んだこと、そして、それを現場で日々実践したことが、やはり大きかったと思います。

「子どもの未来を科学する」という意味が身に染みて理解できるようになったんです。

今までの知識や経験を体系立てることができた

――お勤めの学校の先生や周囲の方の反応はいかがですか？

Aさん　同僚の音楽の先生にも薦めたところ、子どもたちが楽器を使うときなどの動きがよくなったようです。「手先や指先を動かすビジョントレーニングの前に、大きな筋肉や関節を動かす運動をするといいですよ」ともアドバイスしました。

中学校の支援学級を受け持っていらっしゃる知人の先生にも、横田さんたちのメソッドやつまずきのある子どもへの眼球トレーニングをお教えしました。やはり子どもたちの動きに変化が見られたそうで、これからも続けて実践していくとおっしゃっていました。

また、小学校で肢体不自由を抱える児童を見ている先生にも眼球トレーニングと、感覚統合につながる目と手の協応トレーニングをお教えしたところ、すぐに実践なさり、早速効果があったそうです。運動会で以前はできなかった旗上げの動作が、音と指示に合わせて間違えることなくやり通したそうで、周囲の皆さんが、とても驚いておられたとの報告を受けました。

――それは私どもにとっても大変うれしい反響ですね。Aさんご自身も、ビジョントレーニングに対する印象がかなり変わりましたでしょう？

Aさん　変わりました。一般書籍や教材では捉えきれない部分がありましたから。

養成講座ですごく腑に落ちたのは、ビジョントレーニングは、目の運動だけでなく、感覚統合や胎児からの原始反射の影響、子どもの意欲などのメンタル面やコミュニケーション力なども含めて、様々な要素が複合的に絡み合って成立しているということです。

――その様々な要素の中には、Aさんが長年現場で培ってこられた豊富な知識やご経験も含まれていると思いますよ。

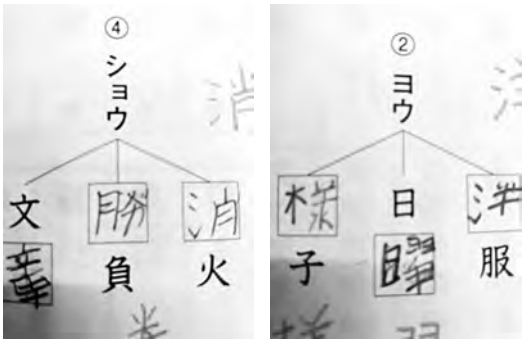
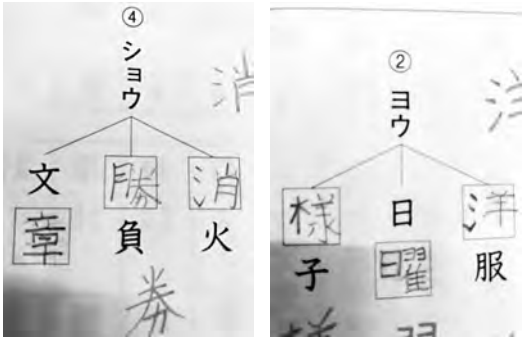
Aさん　たしかに今までの教員生活で勉強してきたことはたくさんあるのですが、実効性が薄かったように思います。それが今回すべてつながった。いわば体系立てることができました。

支援者が体系として理解しつつトレーニングを行うのと、そうでない場合とでは、子どもたちのつまずきを解消していく上で天と地ほどの違いです。そこに気が付いたことが、私には何より一番の収穫でした。

――それと現場においては、子どもたちの自己肯定感のアップが一番の収穫ですよね？

Aさん　はい、その通りです。最近はいちいち指示をしなくても、率先して目の運動をしてくれるようになりました。無口で引っ込み思案だった子が連絡日誌に「自分は本がスラスラ読めるようになりたい。どうしたら読めるようになりますか？」と書いてくるようになりました。教師冥利に尽きる成長度です。

漢字テストのビフォア



アフター（3カ月後）